2011. 6. 8　朝日新聞

井上道義の 未来だった今より

♫ 一回性を生きる

この列島に住む人間が、今ほど自ら学ぼうとしているのは、明治維新以来ではなかろうか？　革命というのは民衆全体の心に何かが発火した時に起こる。震災が僕たちに与えた無力感、その源を探った結果は多分、数年のうちにはっきりと形を取るだろう。

この時代、時間と興味があればインターネットで、語学力があればさらに広く、世界中の情報を引き寄せられる。熱帯の島でも極寒のツンドラでも、ネット情報に差はほとんどない。

今、列島に住む人々は安全神話を、愛してやまない自然に覆され、怒りの方向を探っている。しかし、超越すべき問題は自分ひとりひとりの中にあると気づいているのではないだろうか？

情報は楽譜のようなもので知識そのものではない。人に演奏＝再利用されて、初めて真の価値を生む。我々は、情報はあっても正しく予想する力はなく、避けえないことがあると知ってしまった。責任とは？　政治とは？　国とは？　便利さとは？　も考えなおしている。何より「死」という隣人がいると強く認識したと思う。

広い世界には私たちの知らない美しいモノが無限にある。しかし、平和な日常でも、すぐ近くにいつ訪れるかわからない「別れ」があるのだ。

「コンサート」という、一見、生を謳歌（おうか）し華やかさを追いかける「祀（まつ）り」は、作曲家の生きた時間の証拠である楽譜を「聞こえ見えるカタチ」として演奏＝再生させる行為だ。それは死と隣り合わせのエロスの発露そのものと思う。舞台でもできる限りの知識と知恵で道を整え、それでもなお予想がつかない一回性の中に、勇気をもって命をかけて飛び込んで行く他はない。

（オーケストラ・アンサンブル金沢音楽監督）